

丹生川地域

乗鞍岳

(乗鞍スカイライン・五色ヶ原)

Norikuradake

語り手 上平 尚
聞き手 山本真紀

企画 高山市

取材日: 令和5年11月15日

乗鞍との関わり

生まれは、丹生川の久手です。旗鈴の中学校を出た後は、東京の叔父に預けられ、東京の高校、写真関係の専門学校を経て、叔父の経営する東京現像所に勤めました。有名な写真家である秋山庄太郎先生から指名されて仕事ができるようになり、芸人とか紹介されました。そこで出会いの財産をたくさんいただきましたね。13年ほどの東京での学び、教え、体験があって、現在の自分があるんだと思います。

僕は、もともとサービス業的な仕事をしたかったんです。その思いが、スキーと山に関係する仕事に繋がったということです。その仕事をするためには、いろんな資格が関係します。自然公園指導員、日本自然保護協会の自然観察指導員。安全管理の面では、日赤の救急指導員、全日本スキー連盟のスキー指導員、パトロール員とかね。そういう仕事をしていた関係上、行政と関わりがあって、乗鞍スカイラインにも関わるようになりました。

スキー場を始めたのは、30歳の時です。最初「ほおのき平スキー場」を立ち上げた時は、久手の地域の人達みんなで、立ち上げの時から関わり、運営に成功したのです。丹生川村が公社を作って、五色ヶ原の元になった「ペンタピアスノーワールド」というスキー場を作る時に、公社の仕事を依頼され、コースのレイアウト設計から事業の運営に関わったんです。

スキー場という冬場の仕事はあっても、夏場の仕事がないと、後継者を育成することができません。通年雇用できる職場を目指して、夏は山、冬はスキー場ということで「ペンタピアスノーワールド」では、夏は山菜ツアーなどをやりました。結局、植物と関わることでですね。山菜の採集の勉強会とか自然観察とかをやりました。しかし、高山市の合併によって、残念ながら、スキー場は町にひとつということになり、「ペンタピアスノーワールド」スキー場は、閉鎖することになりました。閉鎖となったスキー場は、国道158号沿いにおいて、立派な建造物や駐車場も整備されていました。丹生川村は、有効な活用に向けて、新しい事業を模索し始めました。

「保護と利用」へのチャレンジー五色ヶ原の森創業ー

富士山が世界遺産にならなかった理由のひとつに、ゴミの山と排泄物の匂いが挙げられたそうです。富士山の清掃で有名になり、いろんなところで講演をされていたアルピニストの野口健さんが、丹生川にも来てくださいました。その折、富士山の話聞いたことが、大きなきっかけとなり、村長が、五色ヶ原開発に傾注し「どんなに自然の豊かなところでも保護をする。しかし、保護するだけではなく利用もしなくては」という一番難しい「保護と利用」にチャレンジされることになったんですね。SDGsは、世界中「持続可能な限り」と言っていますが、それを23年前にやったことが評価されて、エコツーリズム大賞をもらいました。

五色ヶ原の森の創業理念である道づくり、植生調査の指導を依頼した世界的な植物学の権威であられる宮脇昭先生との出会いがありました。著書「4千万本の



上平 尚
昭和15年7月29日生

プロフィール

丹生川村久手生まれ

〈学歴〉

旗鈴中学校卒業

雪ヶ谷高校卒業

東洋写真専門学校卒業

〈職歴〉

東京カラー現像所

協同組合朴の木平

丹生川村企画商工観光課

木を植えた男が残す言葉」で有名になった方です。宮脇昭先生は「自然の保護と利用は、元手を食い潰さずに、利息で食いつなぐという精神じゃなきゃ駄目だ。それで一躍、金を儲けようとかじゃなく、生活をしていければ良いのだ」という考え方をされていました。昔で言う日本的な自給自足でしょうね。そうしなければ、自然の恩恵との共生はありえないよって指導を受けたことが理念となっています。

3年間は、植生調査と道作りでした。広大な面積で、しかも、たくさんの地主さんがいらっしゃる土地でそういうことができたのは、地主の方の理解と協力の賜物。本当に皆さんの理解と協力のおかげですよ。地主さんから、90センチの幅で土地をお借りして、そこでの道作りが始まりました。冬場のうちに調査しますので、雪の深い中を道なき道をコース取りをして、五色ヶ原ができるに至ったんです。

五色ヶ原のオープン前に飛騨・世界生活文化センターで、世界シンポジウムがありました。中国とかスウェーデンといった北欧などいろいろな国から来ていただきました。これも、宮脇昭先生の人脈ですね。日本ナショナルトラスト協会からも保護指定になっている五色ヶ原の森は、国有林、市有林、会社、個人、共有と5種類の地主さんの理解と協力があって、3本のコースが完成しました。宮脇昭先生は「命の森」と言われましたね。人が生きていくため、大切な自然と環境は守ること、共生することによって必ず結果が出るものなんです。共に生きなきゃ意味がないんです。片方だけが利益を被るって考え方は駄目。ある意味では、自然も人間の手が関わらないと駄目な部分もあるんですよ。自然だけってよりもね、生きている物全て、動植物も含めて共に生きなきゃ駄目なんです。



森を案内する上平さん

環境を守るための決断

今、五色ヶ原の森では、3つの滝がメインになっているんですが、^{そうれいがわ}沢上川は、渇水期でも、毎秒10トンの水が出水できることがわかりました。丹生川村には、5つの発電所があるんですけども、1つもダムがありません。それは、乗鞍岳の自然の恩恵を受けた水を標高差のある地形を活かし、川の水の一次利用、二次利用ができています。垂直分布の差が生きているんですよ。

乗鞍は、600メートルから3026メートルまでの標高差があります。これだけ垂直分布に差があるので、植生がとても豊かで、丘陵帯から山地帯、亜高山帯、高山帯があります。高山帯の森林限界を超え、ハイマツとナナカマドだけの「ガレ場」になりますが、その手前には亜高山帯の針葉樹林があります。最近、「見る・聞く・触れる・浴びる・香る」の五感を養うことや健康寿命を目指して森林浴をする人が増えていますね。そういうことから癒される場所であると言えます。“五感が冴える”森の刺激では、広葉樹よりも針葉樹の方が、フィトンチッド(テルペン)が多く、健康に良い物質を放出してくれます。

乗鞍スカイラインは、平成15年6月末に30年間の償還期間が終わりました。一般県道になり、無料化されました。しかし、一般県道になった後、今まで通りの使い方ができるかっていうことになると難しい。やっぱり、自然環境が悪くなっている事は歪めようのない事実でした。ちょうど、私が観光協会長の時でした。だから、地域が大事か、観光が大事かみたいな感じじゃないですか。すごい突き上げがくるだろうと思っていました。ましてや観光協会だから、マイカー規制なんて絶対に反対するだろうって思っていましたね。しかし、丹生川村はありがたい

ことに、乗鞍スカイラインがオープンした後、村で決議して「乗鞍の自然を守る会」ができていた。「乗鞍美化の会」もあった。乗鞍の環境を守らなきゃ駄目だっことで、議会総決起大会までやっていました。そのおかげで、マイカー規制につながったと思います。5代の村長に渡って、丹生川村は「農林業と環境の調和ある村づくり」が行政の指針だったことにもつながっていますね。観光協会のキャッチフレーズは「雪・花・サラダ」。「サラダ」は、野菜ね。主に高冷地野菜のこと。農業と観光だけではなく、商工会とか他の組織の原点も環境で繋がっている村だったことが幸いして、現在に至っています。



乗鞍スカイライン

思いがけない自然災害

怖いことは、やっぱり、自然災害。「自然の中は崩壊と再生の繰り返し」という先人たちの教えがあります。たまたま、自分が崩れる時に遭遇するかしらないかだけですね。乗鞍でも土砂崩れがありましたよ。一ノ谷の上は、何回も崩れていますし、死亡事故もありました。以前、鉄砲水で平湯峠の下で高山の人が5人死亡しました。乗鞍スカイラインがオープンしてからも、通行止めにするかしらないかのちょっとした間にたまたま親子が乗った車が、一ノ谷の「ガレ場」(岩石が積み重なった場所)の中に埋もれてしまったんです。オートバイも土砂崩れに巻き込まれたけど、はねられたおかげで、乗っていた人だけ外へ投げ出され、土石流の方へ行かなかったもんだから助かりました。山の中ではね、本当に思いがけない災害があるということです。

一ノ谷には、土石流が堆積しているところがあって、そこは、昔からある硬い地盤じゃない。流れてきた土砂が、蓄積して砂山になっているような状態です。昔から、一度崩壊した場所は何回も繰り返して事故が起きています。修復や復旧工事では、地域の土地勘のない人をコンサルタントの専門家だと過信しすぎることは間違いかもしれませんね。やっぱり、地の理ね。地元の集落で土地を一番わかってる人に聞いてから、掘ったり削ったりしないとね。今、便利だからボタンを押せば、どんな図面でも作れるし。耐用年数も機械が計算してくれます。でも、肝心なその下の基盤となる土台が、ゆるい所と硬い所では、全然違うので、対策も変わってきます。

地理を知る、地図を知る、地域を知る

今のように利便な生活でなかったこの地域の生活は、70年前までは、^{かまど}竈文化・^い囲炉裏文化だったんですよ。飛騨の生活にはストーブや石油ガスなんてものはなかった。水道もない。だからみんなと仲良くするわけですよ。水が欲しいから。だから町内会っていうのは「結」があったり、掃除したりするじゃないですか。助け合う昔の文化ですね。「地理を知る、地図を知る、地域を知ることが大切」だと宮脇昭先生が私たちに指導してくれました。インタープリテーション(翻訳して伝えること)ですね。ガイドは、花の名前を伝えるだけじゃないんです。この地域の生活の中でどのようにその植物が関わってきたかを語れると、飛騨に来た人は「ああ、飛騨に来て良かったな」ってなります。飛騨の人は、植生を語るときに、飛騨の生活が入るから面白い。「これは何科の植物で名前は何々です」って言うだけだったら、大学の講師と一緒に。でも、地域の生活を知っていると、体感した事を語れる。その地域の生活がにじみ出た地域の匂いがするって

うかね。その人のバックに、そこでの生活がある。それが強いんですね。

乗鞍って水を育む大事なところなんです。川を守ることが、海を守ることにつながります。岐阜県が「清流の国」ってやっているのは、やっぱり「日本の屋根」と言われる高い飛騨山脈があるからかな。岐阜県は、水を守るためにいろいろと考えています。水資源は、大切ですから。

心配なことは、温暖化です。今年の7月に乗鞍の池が枯れました。原因は、雪不足かな。温暖化によって、地球規模でどんどん気温が上がっています。今年はハワイとかカナダでね、すごい火事がありました。世界の中には、暑くなりすぎて、もう燃えそうだっていう国もあります。日本は70%の森林面積がありますが、世界は30%ほどしかない。これから日本が狙われるのは水じゃないかな。

五色ヶ原もいたるところに伏流水が出ます。源流を歩くコースがあって、川ができる様を見せる場所もあるんです。いろんな所へ行ってきたお客さんが、巡り巡ってここに来るんですよ。すると「この水は飲めるんじゃないですか」って訊かれますね。そういう時は、流れている水は動植物の排泄物とかが心配なので、湧き出たすぐそばの所とか、ワサビのあるような場所で飲みましょう、口を灌ぎましょうって答えます。

乗鞍は、もともと信仰の山だったんです。明治時代は、すごいたくさんの人が訪れた。わりと皆さん知らないですけども、飛騨側から8カ所、長野県から2カ所、乗鞍に登る道があり、いかに歩いて登る人が多かったかがわかりますね。古い文献を見ると、ほとんどが神主さんとかかな。その頃は、ちょっと変わり者で家のことは何にもしんけど、山の開拓ばかりに力を注いでいた人もいて、後に「板殿仙人」と言われたりしたそうです。そういう風に、ちゃんと地域で生活していたんですよ。宮脇昭先生が言ったように「元手を食いつぶさずに、利息で食いつないでいく」ことは大切ですね。山菜とかきのことか自然の物をいただく生活だったね。先人たちから、僕らが学んできたようにこれからもやっぱり、継続は力なり。どこまで我慢できるかですね。いや、我慢という言葉はおかしいか。普通のありきたりのことですが、自分たちの地域がね、平和で生活していける環境であればいいんですね。それが何よりじゃないですか。

自然を活かして暮らす

不便な生活から今では便利な生活になっていますが、昔の地域の生活をふり返ってみることも大切で、先人からの教話を話すことも大事ですね。囲炉裏文化の時代は、生活林の木を切って生活していましたね。花餅の木はね、薪を切って生活していた時は、たくさん採れたんです。ミズナラとかカエデ系の木を切るとね、萌芽更新って言って、木を切ることで次々と新しい生命が誕生します。生活人数によって、どれだけ「春木山」をやればいいのかを考えました。「春木山」は、お正月を過ぎてから3月までに、薪1年分を切って、家の近くまで運ぶ文化です。なぜ、この時期に木を切るかっていうと、冬は、水が全部下がっている時だから、早く乾燥するんです。建築材にする時も狂いが少ないですよ。夏に切った木は、水をたくさん含んでいるから腐りやすい。だから、冬に木を切るのが良いんですね。

例えばコメツガって木は、丈夫で激しい環境で育つから、ルーペで見ないと年輪が細かくてわからないね。火山岩に付いた苔を相手に成長したやつだからさ。ほんとにわずかな栄養で、もういつ倒れるかわからない状態で苦労して育つから

丈夫だね。腐葉土があったり、流れてきたゴミや土が溜まった所には、シラビソが生えるんです。シラビソは1月、2月にぐ〜っと縮こまって、マイナス20度の気温に耐えます。それが、3月の彼岸頃になると、急に暖かくなって膨張するもんだから、木の皮が割れて裂けるんですよ。これを凍裂って言うんですけど、ちょうど猟銃を打ったようなバキューンって音がします。冬が終わりかけて春近くなってきたなって思う頃はそういう音がして、びっくりしますね。乗鞍高原の方だと、国民休暇村の近くの池のあたりの針葉樹のある所にシラビソがあります。五色ヶ原だと、シラビソコースの辺にありますね。そういう風に植物もちゃんと敏感に、自然との共生の中で表情を出してくれるわけよ。凍裂などで木が裂けると腐りが入って、長生きしない。その代わりに、倒木更新と言って倒れた木が次の木の栄養源になります。倒れた木の所、1列に列を作ったみたいに新しい芽が生えてきます。それがまた可愛いんですよ。大きくなるのは、何百本もある中で限られるわけだけれどさ。倒木更新、根株更新、萌芽更新とか、いろいろな形で木が育つね。

花餅の株にするのはカエデ系の木です。五色ヶ原の山にカエデ系の木は、12か13種類くらいあるんですよ。それらの萌芽は赤いので、白い餅を付けることで綺麗な赤白になったんです。そういう理屈を知っている人は、ちゃんと山でそういう株を見つけて、長めに切っておきました。そして、台座の部分で切って、萌芽の部分の花餅の株にする。片方だけに向きがあるやつとか、四方八方に出るやつとかいろいろな株を作っておくと良いね。あの場所に置く花餅の台座には、片方だけに伸びるのがいいかなとか。そういうことまで考えて作っていましたね。お正月の餅つきで行っていた花餅作りも時代の流れの中で、現在では、作るのではなく買う時代へと変わってきましたね。

お雛様の時には、花餅の餅をばらして、豆と一緒に炒って食べました。ちょっと手をかける家では、メリケン粉にお砂糖を入れたやつを絡ませ、三嶋豆みたいな風にしていましたね。お雛様の時、子どもたちがみんな「雛様見しとくれ」って、雛様を見て回ることが習慣になってました。毎年、見て回って、その家で炒った豆やお菓子がもらえるのが楽しみだった。物が無い時だったからね。「雛様見しとくれ。あられはいらんで」と謙虚に言いいながら回りましたね。雛様とか飛騨の行事が、1ヵ月遅れなのは、飛騨の植生に合わせているからだね。田植え餅もそうですね。今年も豊作になるようになって、前の年から残った餅米をついて、田植えが済んだ後、近所に配るんです。田んぼや畑を持ってない人もご相伴にあずかりましたね。地域ぐるみで、そういう文化とか生活とか喜び、悲しみを分かち合いました。田植えは、大体、梅雨時。昔の人って賢かったね。もともと抗菌作用を持つ朴葉で、餅を包んで真空パックの役目をさせたんです。田植え餅を焼くとね、朴葉の香りが移るし、くっつかないでパカッと餅が取れるんですよ。秋は秋刀魚の季節でしょ、魚を腸ごと焼くと脂がたくさん出ます。今は洗剤も良いし、お湯も出るし、油の物もすぐに洗えるけれども、昔は油ものを洗うのは大変だったの。囲炉裏の灰が磨き剤の代わり、たわしは^{たらなわ}俵縄を巻いたものだったね。だから洗うのが大変で、朴の葉っぱを使ったの。お皿の上にこの葉っぱを置くだけで、腸の食べないところや残飯もそのまま葉っぱに包んで、囲炉裏にくべれば良い。化学肥料のない時代は、灰を撒いて肥料にして、循環させていたの。朴葉味噌に使う時は、朴の葉っぱを1回塩漬けにして、干して使っていました。こうすると葉っぱが燃えないの。それをしていないと味噌以外のところも全部燃えちゃうから、賢いところはそうやって使っていたの。

自然の恩恵と共生する場所

もともと祖父母は、久手で茶店みたいな出店をやっていました。登山をする人たちの休むところね。今で言うドライブインみたいなもんかな。昭和23年頃、濃飛乗合自動車の上嶋清一社長が、バスの運行に必要なメンテナンスのお願いに訪ねて来ました。うちは、バスが全部止まって、ラジエーターの水を入れ替えないと上っていけなかった場所でした。また、帰りは、ずっと急な下り道ばかり続くので、ブレーキを冷やすために車ごとザブッと通っていけるプールもありました。上嶋清一さんが、高山の旦那衆から融資を集めて、道幅を3メートルに拡幅されました。戦争ですさんだ気持ちを癒すために「雲上の乗鞍」ってということで登山バスを走らせようと試運転をしたの。それで翌年の昭和24年から、登山バスの運行を始め、後に乗鞍スカイラインを作るまでは、そういう道路を使っていました。

有料道路のスカイラインの30年間の償還期限が終わった時、一般県道になりましたが、そのままだと乗鞍の自然は駄目になりそうでした。まず、凄かったのは、排泄物の匂いがしてきたこと。駐車場とバスターミナルのあいだにトイレまで我慢できずに側溝が全部便器状態。400台くらいしか駐車場がないのに長野県側と岐阜県側からどんどん車が上がってくる。だから、車の尻がトンネルの下まで並んだでね。ツルガ池の駐車場の所で、岐阜県側の車を3台入れると長野県側は1台とか。ほら、金を取っていたから岐阜県側の方を早く入れる。そうすると長野県側で待っている車はなかなか番が来ない。そんなことで、すごく不評だったの。

乗鞍の雪の上でスイカを冷やして食べ、生ゴミは置いて行く。自販機で簡単に買える飲み物の空き缶やペットボトルなんかを持ち込み、持ち帰らずに置いて行くんです。ゴミ処理場には、空き缶をブロック状にプレスする機械が置いてあって、毎日集めた缶を洗う水がないから、液をきってぎゅっと圧縮してブロックにしなくてはならないくらいゴミがたまりましたね。最もひどかったのはね、下水。今は、浄化槽があって処理していますが、昔は、山小屋の排水を池に流していたの。そりゃ池が匂ってきますよね。下水が流れてきますから。それで、丹生川村は美的な面でも乗鞍を守るために美化の会を作りました。でも、なかなか美化の精神が行き届かなかったね。だから、マイカー規制するしかなかった。交通渋滞もありましたしね。どれだけ車で待っていても駐車場に入れんから、逆に不快になりますよね。だって天気がいいと、駐車してから半日は帰ってきませんから、とても回転率が悪いです。それに車中泊をすると、排泄物を含め生活上のものが全部出るわけです。長時間そこに滞在しますから、処理が追いつかないじゃないですか。最盛期は、トイレの汲み取りが、二日もたないね。だからって、トイレを増やせばいいってもんじゃない。それはちょっと違う気がするな。

いろいろ加味して、当時の小谷村長は、五色ヶ原を、観光地的ではなく、自然の恩恵と共生する場所にしようとした。お客さんには、自分たちのグループが山を独占している感じで歩いてもらいたい。そのために、他のグループへの案内の声が聞こえちゃ駄目、笑い声が聞こえちゃ駄目、一定以上のインターバルをとらなければ駄目というルールやマナーがあります。だから人数制限が必要なんですね。

ナショナルパトロールの関係で、カナダとかフランスの仲間と付き合っていて、彼らに「ガソリンが急に高くなった。150円までは許せるけども200円近くになっているんだよ」って話をすると「お前はやっぱり世界一の馬鹿だ。ガソリンは1リッ

トルだろ。お前は、500CCの水を150円で飲んでいないか。なんでお前、水なんか買って飲むんだ」って。そう言われるまで、平気でガソリンより高い物を飲んでいることに気づかなかった。高い山に行くと1本180円から200円します。ガソリンの倍以上だということに気が付かないから馬鹿だって。言われて初めてわかるんですね。でも、日本人でそう考えている人はいないと思います。そういうことを、外国の友人から教えられたりするんです。

乗鞍は、日本が悲惨な戦争をしていた時代、陸軍の航空実験所というあまり平和的じゃないことに使われようとしていた時代がありました。そして、信仰の山でもありました。昔は、東の空を拝んでからでないと仕事しなかった。観天望気の意味合いもあるんだけどね。朝焼けしすぎると、今日は天気が悪いで、イネコキ（刈り取った稲の穂から、もみを落とすこと）なんかは考えん方がいいとかね、鳥の鳴き方がおかしいから、途中で曇ってくるとかさ。とにかく観天望気ができる人が多かったね。そして、宇宙線観測所、コロナ観測所、航空実験所、高山医学研究所。そういうものが次々にできたので、科学の山と言われた時代もあったの。太陽を観測する世界で2番目の観測所だったのが、コロナ観測所。今でも、古い方と新しい方の建物が両方残っているんだよね。

信仰、科学、観光と変化してきた長い時代の中で、いろんなことがありましたね。自然の侵食と再生の話になりますが、乗鞍は、火山の恩恵できた山です。最初は、32万年ほど前に烏帽子岳。その次が4万年前の四ッ岳、平湯大滝を作った火山です。あの溶岩流でね、岩の壁ができています。その後が恵比寿(岳)と魔王(岳)かな。確か、280年ほど前に蒸気爆発はしているけど、乗鞍の山を作った火山活動では、権現火山ができた9千年前が一番新しいかな。

心のふるさと乗鞍

今は、地元の子どもたちほど、乗鞍に行っていないことが多い気がします。旗鉾小学校とか丹生川東小学校は、夏休みに入る前の通知表を乗鞍で渡す終礼がありました。その他にも、ゴミ掃除など美化に協力してました。その子どもたちの作文も乗鞍の自然を守る会を発足した理由のひとつになりましたよ。それだけ子どもたちの声は強いんだよね。汚れを知らない意見が、乗鞍の自然環境を後押ししてくれていた。

僕がね、故郷に戻って来たきっかけは、やっぱり乗鞍があるからなんです。親父がたまたま乗鞍の航空実験場に勤めていましてね、召集されて、戦死したんです。それに乗鞍は、中部山岳国立公園、ナショナルフォレストです。昭和9年に、第1期の認定に選ばれた第1号の国立公園です。やっぱり、郷土が恋しくなる。乗鞍が恋しくなる。そんな風に、心の故郷を求めるところが人間にはあると思うんですよ。

今、便利な時代ですが、不便さを感じる体験をしてもらおう場所としても、乗鞍は最高の場所だと思いますね。そういう所があるってことすら、親が忘れてるかもしれないね。乗鞍の良さを伝え続けるためには、伝言者とかさ、継続をする気持ちを持つ次の代の人たちを育てないとかね。育成だね。やっぱり、子どもたちが一番純真な目を見て、何が大事かってことを訴えてくれると思います。ぜひ、乗鞍をそういう場所にして欲しいなって思いますね。そうすると、自ずとやって悪いことがわかる。私が言葉でいうよりも子どもたちがわかってくれる。そうすると逆に私たちが子どもたちに尻を押されますね。